

The illustration is a watercolor-style artwork on a light beige background. At the top, a large, dark green, irregularly shaped leaf with some white spots is attached to a long, thin green stem. The stem extends downwards to a circular, light blue pond. A small child with dark hair, wearing a white t-shirt and green shorts, is lying on their stomach on the ground, looking into the pond. A small, brown and white cat is walking towards the left in the middle ground. The overall style is soft and artistic.

光函

西原 正

目次

- 意図
- マリオネットの朝
- C a r c o
- 夕立三日
- 胡麻屋の辻
 - ・ひだまり
 - ・胡麻屋さん
 - ・胡麻屋の辻
 - ・耳の中の雨
 - ・椿婦人
- 猫と南風
- 橋
- 背広
- 手紙
- 輝く水
- 光の織物
- 「スミス、空なの？」
- 黄緑のシャツ
- 缶詰
- 花束
- ふたたびの花
- 夕暮れF a n t o m
- 夜の声
- アイロン
- 月光
- 光の函 鹿王院客殿前
- 便り
- 光池
- ...あとがき...

影に切られた蜘蛛の糸と
夜の雨に梳かれた柳葉の風と
朝露の球を
そのままに包んでいく
時間を結わえて
そっと置いておく
夏の意図
石楠花の白を
微かに揺らす
光の意図
手渡された朝が
静かに盛りつけられていく

マリオネットの朝

二階の窓から青いつなぎが浮いたまま
明けてくる空を待っている。
一階の窓から「フランス語会話」
影の声が結露している。
濡れた黒瓦を猫が傾きながら越えていく
彼の方の跡をなぞって。
たぶん、わたしもそのように歩いている
光駆動式のマリオネットだ。
ゆっくりと世界に血がかよいだす。
命をつくる光の糸が
音もなく降りてきた。

店の前面のほとんどを色褪せた黒い木枠に囲まれた大きな硝子窓が占めていた。店内の擦りきれたオイルステンの板張りの床が店の柔らかな雰囲気をつくっていた。

広い坂道の左側にあった。向かい側は巨大なホテルで、歩道にはプラタナスの並木が続いていた。店からはその広い葉と路面電車と、空と、ホテル前面の鬱蒼とした緑がよく見えた。

早朝、坂道を下から見ると、輝くレールがそのまま朝の空に続いているようだった。

去年知り合った人と今日、そこで会うかもしれない。インターネットのジャズファンの集まるサイトの掲示板だけの知り合いである。

コルトレーン、マイルス、ハンコック、...好きなプレイヤーも好きな作品も同じで、いつも私のすぐ後ろに書きこみがあつた。

メールで声をかけたのは私のほうだった。それはそのような趣味の一致に親しみを感じたという以上に、この人のハンドルネームの「C a r c o」が大きな理由だった。

それはあの店の名前だったから。

1972年のまだ冷たい春先。ぼくはほとんど一日、誰とも口をきかないような暮らしをしていた。体を横たえるようにC a r c oの窓辺の日溜りにいた。光に溺れていた。そのままでもいられたらと思っていた。これからどうしようか、その問いを投げ捨てたままの19歳で。

あの時、一緒にただ光を浴び、ジャズを聴いていた女性は一人しかいなかった。交わす言葉も少ないまま逢いつづけた人。そのまま別れた人。

『C a r c oの前を、毎朝6時に散歩しています』

なんのあてもなくメールを送った。なんの返事もなくその日がきた。

三条通りを東へ。右手にホテルが見えてきた。昔のままなのは並木だけだ。路面電車も今は無い。かつてはC a r c oという名の喫茶店、その後違う名前の喫茶店になった「空き地」。まるでぼくの過去はすべて幻だとでもいうように、四角に切られた空き地の前に到着した。30年前と同じく春の朝は寒く、光のあつた髪だけが暖かだった。

背中に声を聴いた。

カモシカのような脚の若い女性が立っていた。小さく笑ってお辞儀をすると、彼女は光のほうへ顔を向けた。その先の坂の上に黒いシルエットがいた。しずかな立ち姿だった。

女性が手を握ってぼくを連れて行く。

何か声にならない声が絞りでたような気がした。情けないほど小さく、掠れた何か。

シルエットのほうから朝風が吹いてくる。何かか軋みながら立ちあがった。

『C a r c o』の匂いがいつべんに、脳裏に溢れた。

光の中へ、泳ぐように歩き出していた。

(了)

夕立三日

1

何日も続いた雨がびたりと止んだ午後、朝からくすんだ眼をして、ベッドの上で丸くなっていた犬のハナと散歩に出かけた。

長い坂道をゆっくりとあがっていった。坂道はケヤキの並木道で蛇のようにくねっている。長い梅雨の間に葉は繁りに繁り、葉を透けてくる光は、今までよりも濃く緑に染まっていた。

壁に沿って歩いていると、前方から自転車が次々と滑ってくる。この道の突きあたりは大学の南門で、その駐輪場から流れるように降りてくるのだ。

犬が壁の匂いを嗅いで止まっている間に面白い事に気がついた。

次々と坂をくだってくる学生たちのうち、男子学生のほとんどが得意げに両手を離しているのだ。次から次と。そして、みんな無表情なのがおかしい。

雨あがりの空気はきれいに澄んでいて、ゆるい風が吹いていた。クスノキの細かな葉は光を乱反射する緑の鏡になって、雨でぐしゃぐしゃになったグラジオラスの赤や黄の花は濡れた紙のオブジェのように立っていた。

微かに水を含んだアスファルトの上をぼくらは歩いていった。

大学の門の手前を左折すると、イチヨウの並木が、薄いグレーと緑を混ぜたような翳の道をつくっていた。光で少し傷んだ眼にはとても気持ちがよくて、ハナが1本1本のイチヨウの根元の匂いを確認しているのをいいことに、葉を透かして空を見たり、空気の感触を確かめたり、向こうからやってくる学生たちを眺めいた。

すると、こんどは走ってくる学生のほとんどがポークパイハットを被っていた。

ぼくが少し首を傾げたのかな。ふっと微笑みをくれた女性がいた。彼女は薄い更紗を首に巻いていた。頭にはポークパイハットだ。

やがて並木道から坂を下って歩いていった。この道は二つの古い寺の伽藍と伽藍の間の道で、右側が土塀になっている。崩れかけていたそれを、最近修復工事しているのだった。その右手の土塀に沿っていくと寺の門が現れる。それほど広くはない。

今日は土塀の表面がコテできれいに整えられていた。その美しい面にしばし見とれていた。

その時夕立がきた。

いきなり大粒の雨が落ちてくる。慌ててハナと門まで走り雨宿り。雨は激しく降りだし、しばらくは身動きが取れない。すると若い女性がひとり頭を抱えながら走ってきた。ポークパイハットは被っていない。小さく悲鳴をあげながら門の下に跳びこんでくる。ハナが嬉しそうに巻き尾をぶるぶるさせて、光る眼で彼女を見ている。肩にかけた鞆からちいさなハンドタオルを差し出すと、すみません、とちいさく頷いて髪と腕とうなじと手と...次つぎとぬぐっていく。

ハナがきゆうん、とないた。

雨はますます激しく、動きはが取れない。門の横の栗や欒、楓などの緑がどんどん鮮やかになるのを見ていて、ふと土塀の異変に気づいた。壁が雨で削られ始めていたのだ。正確には塀の上の割れた古瓦から流れる水が土壁にあたって、ゆっくりと削っていたのだ。壁の中に埋めこまれ、完成した時は透けて見えていた藁がむきだしになりつつあった。

ぼくはなにか叫んだのだと思う。

ぼくは雨の中に出た。肩の鞆から、犬のために用意しているビニールの袋や折りこみ広告をたたんだものを慌てて出して、その瓦の上にくつも載せていった。流れが止まり、新しい仮の「庇」みたいなものができた。

門の下に戻ってハナにかがみこみながら溜息をつく、布の感触が首筋にあった。

その女性が拭いてくれていた。

「すみません」

次の日も朝から空は鉛色だった。雨は降らなかつたけれど、光は鈍いままだった。ましてアスファルトとコンクリートがいちばん色を占有している街である。そこに空の色が加わり、まるで鉛色の箱のなかにいるような気分になる。そんな街には赤や黄の原色が似合う。だから長靴や傘の子供たちは街に映えていて、大人たちは翳のなかに沈んでいた。

我が家には犬が二匹いる。ひとつは柴系の雑種、ハナ。もうひとつはピレニーズのジャン。ピレニーズというのはその名の通りピレネー山脈に先祖を持つ巨大な犬である。ハナの体重が16kgに対してジャンは70kgになろうとしていた。老犬のジャンは足が弱っていて、よほど体調がよくなければ外には出なくなっていた。家の中でも排泄ができるように場所を作り、そのように訓練もできてはいたから、なにがなんでも外でなければ排泄をしない、ということにはなかつたけれど、やはり犬自身はやはり外がいいのか、動けるときは何とか外で排泄をしようとしていた。蒸し暑いこの朝、ジャンは寝ていた。顔を少し上げて、大きな輝く眼をふっと閉じるのが、いつのまにかぼくらの間の「合図」になっていた。

ハナと朝の散歩に出た。

昨日の土の塀の前を通った。塀は青いビニールシートにすっぽりと覆われて瓦と土壁がどうなっているのかは窺い知れなかつた。昨日この門の下で、あの女の人とはそれ以上言葉を交わさずに、雨が上がるのを待った。ぼくも喋らなかつた。出さなくても構わないような、不思議な気配があの時、漂っていたものだから。

歩いているうちに空の灰色が緩んできて、光が少しづつこぼれでてきていた。土の塀を過ぎたあたりではだいぶあたりは明るくなり、道路や葉が輝きだしていた。ハナが草を食べ出した。細い雑草で、このあたりに行く犬たちの多くがこの草を食べる。その草は金網フェンスの向こうから道へはみ出して生えていた。フェンスの向こうは空き地だった。一面の雑草である。見つめていると、空き地に光が溜まりだした。草の輝きが内へ向かっていて草全体で輝きだしたのである。まるで光の「函」だった。空き地の中が白く輝きだしていた。

ぼくはその空き地の光に見とれていた。「きゃうん」とハナが高い声でないた。帰らなければ。うん、ジャンが待ってるもんな。

空の色が灰から白に変わり始めていた。だけど、と思う。今日もきっと夕立だ。「夕立三日」の季節だからね。

ハナが腰を振りながら家に向かって歩き始めていた。

昨日、家に帰ってから、夕立が来た。あたりを轟音が埋め尽くしハナは居間のカウンターの下に隠れてしまった。ジャンは雷に吠え返した。頼もしいけれどもうさ。 「もういいんだよ。いいんだよ」とジャンをなだめたけれど、ジャンは本気で雷に怒っていた。二階の猫たちは雷に恐れをなして、どこかにひそんでいる。猫たちは「気配」を消すのがとても上手で、狭い家の中だということに、どこにいるのか全然わからなくなるときがある。

そんな猫が3匹いる。

夕立はいったん上がったのだけれど、雨は深夜にまた、凄い音を立てて降ってきた。水が地面を力任せに打ちつづける音を聴きながら眠った。

早朝の散歩の時には雨は止んでいて、街には薄い光まで射していた。いつもの散歩の道にはいくつも花柄が落ちていた。真っ白なシャクナゲ。オレンジのノウゼンカズラ。アスファルトの坂道は砂粒まで洗い流されて、清潔に見える。その上にそっと置いたように花の骸がならんでいた。

もう夏だ。たぶん今日、夕立が降って、明日からはからりと晴れ渡る。天気予報が何を言おうとそうだ。そして夜にはハネ蟻が街灯の周りを飛び回るだろう。

今までのがそうだったから。「夕立三日」だから。

夕方、夕立の前に犬の散歩を終えなければ、そう思って早めに家を出た。土塀の前になると、どういうわけかビニールシートがはずされていた。ぼくが掛けた紙とかビニール袋も取り外されていた。職人さんが壊れた状況を確認に来た

のだろう。それにしてももうすぐ夜だ。のんびりしている。

長い涙のかたみに挟れた壁のなかにそっと指を入れてみた。細かな石の微粒がすぐにこぼれてくる。早く手当てをした方がいいだろう。ハナを待たせて壁を調べてみると、「涙の形」が三つほどあった。

「こんにちは」

ふいに声をかけられた。

「ワンちゃんの名前教えてください」振り向くとこのあいだの女性だ。もうしゃがみこんでハナの鼻の頭を撫でている。ハナの巻き尾がバタバタと揺れている。

「ああ、こんにちは。ハナっていうんです。...この前はどうもありがとうございました。御礼も言わずにずいぶん失礼しました」

「いいえ。ああハナちゃんね。きれいな顔」

「壁、挟れてますね」

「うん、瓦を治さないと。せっかくきれいに塗られた壁なのに、もったいないですよ」

「土壁の間を歩くとなんだかとても落ちつくんで、この道が大好きなんです」

その時、音のない稲光があたりを明るくした。まずい。

「光が吸われて行くような感じですよ。輝かないというか、光を染みこませていく感じがして」

彼女がしゃべり終わるか終わらないうちに雨が降り出した。夕立だ。寺の奥から職人達が走ってきて、あっという間に青いビニールシートで壁を覆った。

ぼくらはまた立ち尽くしたまま、またしても門の下にいた。

犬の話をした。彼女は昔、実家でずっと柴犬を飼っていたという。もちろん犬が大好きで、今はアパート住まいだから飼えないけれど、将来は絶対に犬と暮らすという。

「やはり柴、ですか」

「そう、柴犬ですね。ちいさときの『いぬころ』ってかんじがたまらないし。負けん気が強いし強情だけど、とても人に忠実、っていうか優しいんですよ」 そういいながらハナのあたまをずっと撫でてくれている。

三日目の夕立はあっという間に上がった。

もう少し話をつづきたいな、そう言おうとしたら、ハナと彼女と一緒に歩き出していた。言葉は途切れたままで、うなづく後髪が、射してきた光に輝いた。

夏が来ていた。 (了)



胡麻屋の辻

ひだまり

いつまでも光の燐粉が降る
地上の猫 地中の種 待ち人の白い腕
漲る光のいれもの
熱に抱かれ
音がとけて 無

時がほどけている気配
縛りを解す
やわらかな手のような
ひだまり

光が世界に反射する
鋭くなる影と
この世を離れていく
忘れられた約束を連れて

胡麻屋さん

坂の上で白いのれんと柳が揺れている
白い腕がゆっくりと
横に切っていくよ
遠くから「はあーい」
夢のように「はあーい」
すぐに鎮まっていく気
瓦の上で猫が輝きだす

白胡麻黒胡麻練胡麻大中小

「いつものでよろしおすか」

「ところで、黒猫が柳の木からお宅の瓦に飛び移ってますよ」「はい」

「ところで、家のものが大好きでいつもおいしいいうてるんですよ」「おおきにい」

瓦の猫がゆっくりと眼をひらく

「おまえは胡麻がいいのか、このひだまりが好きなのか」と猫

「ごまぢゃ」

陽がぬくもりをくれるから

すみませんどちらでもあるのです

胡麻屋さん

胡麻屋の辻

今月も胡麻を買いに公園から街を擦りぬける
胡麻屋を見通せる角に来ると、柳の下に少年が立っていた

胡麻屋はちょうど辻の角にあつて、坂の上から下へ、昔川だった道が行き
胡麻屋の角で欄干だけを残した橋のある道と交叉している
欄干の道を少女が歩いてくるので、ふたりが恋人だったらおもしろいなど
思ったら 見つめあっていた
欄干から折れて少女が少年の前に立っている
ああ、君たちは水の上に立っているように見えるよ
そうだ 水の上に立つのなら君たちのようであればね
水であることを忘れるほど
人を好きにならねばね
ああ、みごとに立っている

「ここ、ごまやさんてわからへんね」
「そやからここなんや。盗み聞きされたかて誰もわからへんやろ」
白い麻地に薄茶でちいさく「ごまや」
まあ、わからへんよね

きちんと前を向いて
「ごめんください」
遠くから「はあーい」
夢のように「はあーい」

...ココノゴマハウチノモノガダイスキデイツモオイシ...
「いつもので」「はい いつもので」
白胡麻黒胡麻練胡大中小のうち白胡麻大をいただく
「おおきに」

辻に出るとふたりは消えていて
柳の枝が二本 折れてなくなっていた
胡麻屋にいる間に突然、水無川に水が溢れて流されたんだろうか
坂だけが濡れて輝いていた

わたしは白胡麻の瓶を持って胡麻屋の辻から駆け出した
わたしのうしろに
鬼がいたのだ

耳の中の雨

もうまもなく天気は崩れていくだろう
すでに雲は形をなくし空気はいちめん薄墨に染まっている
空を仰ぎみながらときおり吹く突風をかいくぐっていた
約束の胡麻屋の辻まで急がねばならない
雨は誰も待ちはしないから
首に一滴の雨粒が落ちた まだ続いては落ちてこない
西に傾いた日が雲のフィルターを透して微かな光を街に染みこませようとしている

急いだ

車と自転車が車間数センチで神業のような離合をやってのけている通りだ
走れなかった
遠雷が響き、とうとうアスファルトに黒い染みが打ちこまれた

急いだ 急いだ

彼女は土砂降りでも柳の木の下で待っているだろう
デッキシューズがつま先から濡れていく
乾ききっていた柳の葉が一斉に生氣を取り戻していく
突然、一気に雨がきた 頭といわず手といわず雨が
打つ、打つ、打つ、打つ、打つ、打つ

胡麻屋の辻が見えてきた
柳の下に彼女はいない
暖簾から白い手と腕が揺れている

駆けた

「雨、やり過ごしてから来ると思ってた
時間もまだあるし
濡れちゃったね」

ふたりの頭上で激しく雨が屋根を叩いている と
遠くから「はあーい」
「すみませんあまやどり」「どおぞ、よろしおす」
あまり雨音が大きいので二人の言葉が消えた

激しかった夕立は一気に退いていき
透明な空気が漂い始めた
空が凄い速さで色を回復していく
くつきりとした群青
浮かぶ白い三日月

「ほら、あれ」
指さすほうを見つめると
五本の電線の上に白い三日月が乗っていた
「ああ『E』！やね」「マイナーの！」
ふたりの頬が繋がり
水の輝く坂を下りはじめた
二人の耳の中をちがう音の
脈が打ちはじめていた

椿婦人

辻から三軒東のおばあさんと仲がいい。猫好き同士。去年、二年間洗えなかった木戸をわたしが洗ってから、特にいい。

「胡麻屋さんの屋根の上の黒猫とうちの三毛ちゃんが恋仲らしいのね」
「難儀なさるならわたしから奴にいつて聞かせましょう」
そんな話を。最近は。

おばさんは「椿まにあ」だ。玄関先と奥の坪庭に木の棚を作って、鉢の椿をづらっと並べている。自慢は全部挿し木ということ。垣根の折れた枝、剪定された枝、花屋の捨てる枝、新鮮さが勝負だと笑う。
「あー、捨てられたものばかりだね はは。はは わたしと一緒にだね はは」
なんちゃって、という。

今日はおばさんのご用事。
道すがら、屋根にいた黒猫に向かって「三毛ちゃん、だいじょぶか」というと、睨まれた。
「ちゃんとしいや」と釘をさす。

「こんにちは、胡麻屋の奥さんから聞きました、何かご用だとか」
ふにゃ、といて三毛さんが先に出てきた。
「あんたを見こんでのお願いなんや。坂の下の寺の墓地しってるやろ。あそこの椿をちょっと頂いてきてほしいんよ」
「ふにゃ、ふにゃ」三毛さんが私の眼を見てしゃべっている。
「おやおやこの子はあなたが好きなのやね。ねえ、あの黒いのをやっつけてもらいましょうね」
「ふにゅあ、そやないにゃん」

真昼間の墓地の空気は真っ白で、音ひとつしなかった。おばさんの指定した木は不思議な花をつけていた。遠くから

見ると青紫、角度を変えると黒にも見える。蝶の羽根のような花だった。

「あのお墓はね、もう何年もほったらかしで、あの椿も伸び放題なんよ。お参りに来る人の邪魔になるから、明日切ると、管理の造園屋さんがいわはったから」

「あかんよ。生木切ったら。剪定した枝をとってきてほしいんや。わたしは地代がたまっていて、ちょっとうろうろしにくうてな」

墓地の外れに、古い供花、お供物、ゴミやら落ち葉やらが寄せてあった。その上にひときわ鮮やかな緑。あの椿だ。花芽のついた枝をいただく。胸からおばさんの真っ黒な花鋏を

ぱちん

音が響くと、手が汗ばんだ。また、鬼でもでるのか。もう堪忍や。枝を三本。袋に入れてゆっくりと帰る。

(そや、これはごみや。ごみを再生するのや。花泥棒ちゃうぞ。)

それでも嫌な予感がしたので、早足になった。

寺を出て坂を上って、胡麻屋の辻にさしかかると、屋根の上で黒と三毛が並んで丸くなっている。眼を瞑って いいじゃないか。

「もしもしこんにちは」木戸をくぐる。

「おおせの椿、頂いてまいりましたよ。なんとも不思議な色の椿でありますな。あ、ところで黒と三毛ちゃん。あれはあきません。夫婦気取りで、もおね。もしもし もしもし もしも————し」

町屋は奥まで戸が開け放たれていて、いちばん奥の坪庭でさしこむ光がおばさんを浮かび上がらせていた。

おばさんは一心不乱に椿の葉を拭いていた。

まばたきもしない眼は鉱物のようだった。

椿の枝が かさり と動いた。

(了)



猫と南風

むかし猫の手品を見た
南風に波打つ河原の緑を
輝く黒猫が裁ち切って歩いていた
切り取り線上で不意に止まり 沈み 消えた

二月ごろ必ず春のような日が 突然 数日だけ訪れる
春の予告の南風
殴り書きの手紙のような

その日 暴風はなかなか終わらない
淀んだ冬の澱が空の果てへ飛ばされるまで続く
松葉が舞う サザンカの花びらが飛ぶ
隠れていた杉の枯れ枝が落ちてくる 地面は
しいのはしいのはしいのはしいのはくりのはくりのはくりのは

猫は風に翻弄される植物を見ている
澄んだ瞳は透明な地球儀のようだ
ふいに出窓から飛び降りると
台所の洗い桶をずらす音が響いてくる
容器の水には目もくれず
閉じた蛇口から水を吸い出している
柔らかな首 光を含む毛

猫の坐っていた跡に顔を置いて外を見ると
猫の形をした桃色の雲が
雪崩れてゆくところだった



橋

ぼくの育った街を訪れた人は皆、迷路のようだという。不揃いな通りがでたらめに網をはっている錆色の街だ。鉄工所が多いからか街は鉄粉まみれになっていたのだ。

通りがあまりに狭いのと機械があまりに煩いから、ゆっくりと話をするのも、運河の橋の上で、それも立ちっぱなしでだった。朝から晩まで、順番に街の誰かが誰かと欄干にひじ乗せて話してた。

ぼくと君は午後4時から30分ぐらいの間だったな。ぼくらより早い時間は中学生、ぼくらの後はおばさんたちだった。ときには橋の上に三組ぐらいいた。

つまらないことも大事なことも話した。

誰も冷やかしななかしらない。みんな、この橋の大事さを知っていたから。

父はいつも独りで無口だった。一度、灰色の背広を着た父が顔を空に向けて、橋の上に立っているのを見たことがある。背広が風にはためいていて、父は胸を張っていた。

ぼくは小学校の下校途中で、橋の手前で立ち止まり、なぜだか見とれてしまった。動悸までした。

その事をいったら、君は口の端を歪めて黙ってちいさく笑っていた。

それから、夏の夜の橋の上に 君とずっと、いたこともあった。

なにをしていたんだろう。熱い砂みたいな手をしてた。

みんなまるで時に擦音をたてるようにして生きていった。ぼくは父の仕事の転勤でこの町を去った。今日5年ぶりに、ぼくは君に逢いに帰ってきた。君はずっとこの街に残っていたから。

街は騒音も錆もすっかり消えて、厚く盛り上がった雲ばかりが目立つ空の下にあった。

迷路の街であることには変わりはない。迷った「ふり」さえ「ふり」にみえない。

ぼくらの街。

午後2時、橋の上で川面に反射する光を体に溜めながら、君を待っていた。灰色の背広を着て、顔を上げて。

父を思いながら。

(了)

背広

その翳は 峡谷のようであり
やはり老年のなだらかな線が見えはじめ

風はエジプトの石工のように光が差すたびに
翳を削ろうとする

光は翳をつくり 風は平準をめざす
強い皺の自在

腕を曲げれば翳 背を丸めれば
いちめんの光
胸に光 背に光 どちらにも翳
それが
まっすぐ ということ

手紙

激しい雨をくぐり 硝子の水滴に弾かれ
生成りの布を擦りぬけてきて
いつのまにか机の上につもっていく
静かな光

机の上に左手
考えもなくうらがえる掌
受け取るかたちをつくって

うごきだした右手 あなたへの手紙
書くことができそうです

輝く水

太陽が静かに浮かんだころ
ふたりの声はやわらかな葉をつくった 脚を伸ばして
腕を巻いて
目を水でいっぱいにして

色を香にかえる光に
包まれた棕櫚の
うえで澄んでいく
水

静かに聞えてくるふたつの脈
捜しあぐねていたのだろうか
声はたがいを呼んでいる

声を光にかえる思いに
みちあふれた皮膚の中で
水はひとつに
輝く

色も匂いも重さも ない。

だけれどそこに 織物があった

揺れる緑の葉 ふるえる深紅の花

醒めた青を流れる白い雲

そんな柄の

道路に円い光のつづれ織りが揺れていた

その水の生地に浮いた花の骸を

風が静かに削っていた

わたしは見たものの中を生きていく

あるいは 見ようとしたものの中を

のぞきこむ

わたしも また

光の織物

スミス、空なの

二重の簾の向こうから鳥の声が聞こえた。雨が上がったようだ。光は相変わらず薄く、椿の葉を打つ水滴の音が微かに聞こえてはいたけれど。音の少ないことが妙子には久しぶりのことだった。妙子の染めの工房は大きな河の横にあって、いつも風の音がしていた。止むことのない草のざわめきにもすっかり慣れてしまっていたから、ことさら新鮮に思えたのだ。

十二畳の間に妙子はひとり座っていた。ここは古いお寺の応接のための離れとして造られ、今では部屋だけが賃貸になっていた。部屋はぐるりを木の縁側に囲まれ、四角い部屋の二つの面はガラス戸になっていた。その外は一面、苔で覆われ同じような感覚で椿ともみじが植えてあった。三月の終わり。空気はまだまだ春にはなっていなかった。晶子がここを自らの日本画のアトリエとして借りている。今日は彼女から招かれたのだ。

晶子とは高校の美術科の同級生で、彼女はそこから日本画を学ぶことを続け、妙子は家業の織物への興味から染色家への道を選んだ。お互い卒業してからもよく会い、作品も見つづけてきている。妙子が河の横に生葉染めの工房をつくった時、晶子は自分のことのように喜んでくれたと、妙子は感じていた。

晶子は六畳のアパートとこの「アトリエ」をまるで勤め人のように、毎日きちんと通っている。たいてい洗いざらしのジーンズをはいていて、その破れたところに妙子からもらった西陣織の帯のはぎれを、きれいにあてている。そして白の大きなシャツにまっ黒のゴムの靴といういでたち。冬はその上にダウンジャケットを着るくらいだった。部屋には水まわりなど、生活に関するものがなにもついていない。晶子は今、渡り廊下の向こう、住職の住まいに繋がっている所にある小さな流しに水を汲みにいっている。ニカワを溶く水だ。

そのあいだ、妙子は部屋の中をじっと見ていた。 畳一面に画布が広げられ、右手には顔料絵の具の壺がきちんと並べて置かれている。そして絵の具を溶く小さな皿と丸い電熱ヒーター。大きなガラスの壺には何本もの使いこまれた筆がきれいに洗い上げられて入っている。何冊もの画帳、スケッチした紙を挟んだもの、その上にこそっと文庫本が置いてある。この寒い部屋で晶子は画面を睨みつけて描いているのだ、と妙子は思った。 空気がぴんと音を立てたように聞こえた。

妙子の目の前には大きな黒猫の絵が完成直前の状態でおかれていた。背景にはウグイス色。画面のほとんどは黒猫で、今まさに跳ぼうとするかのように膝を曲げていて、顔が空を向いている。「はい、はい、はい」そう言いながら晶子が小鍋に水をいれて帰ってきた。

「珈琲のむ」「うん」

「ごめんね、呼び出しちゃって」

晶子は小鍋の水を大事そうにニカワのそばの電熱ヒーターの上に乗せると、いつも持ち歩いている燻した竹でできた巨大なトート風の籠をかたわらに寄せた。

「あ、そこに全部はいつてるんだ」

「そうだよ。ほとんど毎日遠足やねん」

妙子が覗くとそこには画帳、ペンケース、きちんとたたまれたおびたらしいタオル、ランチボックス、保温ポット、折りたたみの傘、などが見えた。そこからポットとステンレスのマグを二つ取り出す。

「遠足というよりもキャンプやな」

バイト先で安く珈琲豆を売ってもらい、それを朝のうちにネルで大量に淹れて持ってくるのだという。部屋に湯気が立ち、やっと空気が鎮まると妙子は思った。

「持ってきたよ」

今度は妙子が自分のバックから、紙の包みを取り出した。

「去年のやねん。な、年に一度しかとれへんから」

紙の包みから現れたのは、「水色」の生糸の束だった。妙子が去年の夏、生葉染めで作った色だ。晶子が身を乗り出してじっと見ている。

「妙ちゃん、これやね。この色なんやね。ずっと探してるいうてたん」

「『そらいろ』。」

「色見本にはない色やね。浅葱、水色、甕覗き...うん、うん、うん」

妙子から生糸を受け取り晶子はずっと、それを眺めつづけた。

「どおやろ」

「うん...」

晶子の目の色が変わっていた。

「きれいや」

数分後にやっと晶子の口から言葉が漏れた。

「妙ちゃんに来てもろてよかったわ。これ貸してくれる。これを見ながら色つくるわ」

晶子の目に強い光が宿っていた。

六月。妙子は京都の四条を歩いていた。暑さと騒音を振り払いながらある画廊を目指していた。晶子から黒猫の絵をグループ展に出したから、という連絡があったのだ。晶子と同じ日本画を描く若手の何人かとの合同展である。画廊に入って、すぐに猫の絵がわかった。

黒猫。

彼女とずっといっしょに暮らしてきた黒猫だ。迷い子猫からずっと晶子と暮らしてきた。名前は「スミス」という。

「さいしょ『炭』ってつけたんよ。真っ黒やしね。そやけど『すみ』って、なんか婆さんみたいやんか。それに雄やし」
それで「スミス」とつけたんだと晶子は言った。にもかかわらず妙子や他の友人も「おすみさん」とか「すみ」と呼んでいた。

絵の下にちいさなタイトルがはってあった。

『スミス、空なの？』

お寺の離れで見た時、まだ真っ白でなにもかかれていなかった、猫のスミスの眼には、妙子が染めたのと同じ「空色」が描かれていた。

夏の終わりある朝、晶子は窓を全開にして部屋に風を入れていた。朝の光はことさらまぶしく。空の青さがとても高く見えた。ふと視線を落とすとそこには黒猫のスミスがいた。

「どうしたのスミス」

スミスはどこかへ跳ぼうとしたまま姿勢を固めている。どうしたのどうしたの、と声をかけても動かない。晶子はスミスの顔を凝視した。スミスの上向いた目は透けて見えて、そこに空が写っていた。まるで宝石のような美しい眼に、晶子は一瞬、言葉を失った。

「...スミス、空なの？」

「みやあ」

スミスは思いっきりジャンプして、晶子の上に飛び乗ってきた。

「みやあみやあ」

「ああきれいな空やね」

晶子はスミスを抱きしめていた。

「どう」

少し遠くから晶子の声がした。妙子は晶子の「空色」をじっと見ていた。 (了)

黄緑のシャツ

少年だった。

十字路の角から自転車に乗って飛び出てきた。全体に「洗い晒した」雰囲気のある少年。自転車の紺色も艶が消え、髪も脂気がなく、細い体に長くて白い腕だった。細い脚を洗いざらしのジーンズでつつみ、うつむいたまま切るように斜めに前をよぎった。シャツだけが黄緑で、微かに光っていた。あまりに素早いので、その黄緑の残像が目からなかなか消えなかった。

とてもその口から言葉が漏れるとは想像できない雰囲気も残った。たぶんおそろしく無口なんだろう。ひよっとしたら1日中誰とも口をきかないような人間かもしれない。

十字路の角は古い珈琲の焙煎屋だった。鈴懸けの街路樹のある大きく広い歩道と、バス停の後にうずくまっているような店だった。前面の戸はいつも全開で、木造の店の内部そのものが、燻されて黒に近いこげ茶に染まっているのが見えた。煎った豆を入れる10種類ほどの古い硝子ケースと、光沢の完全に抜けた焙煎の機械と、粉塵がこびりついた豆を挽く機械がそのなかにあった。機械のすべてが壊れて放置され、もう動かないように見えるけれど、全部ちゃんと動く。硝子ケースの向こうに座っていて、いつも頭だけが見えるのが2代目の裕次郎だ。一代目の親父が同じ名前のスターの熱狂的なファンで、息子もかくあれ、と名づけたのだ。ぼくらの年代には結構多い名前だ。

いつも髪だけが見えているのだが、客から声がかかると、とても嬉しそうに立ちあがる。

「なにしましょう」。

店内には豆の値段と種類が小学生のような字で画用紙に書かれ、ところかまわずべたべたと貼ってある。しかもそれが全部煤けている。こんな店内を見たら、裕次郎の焙煎した珈琲、本人が名づけた「マーベラスブレンド」がどれほどおいしいか知らないものなら、まずここで買い物はしないだろう。事実、この店ではほとんどが常連客か、その紹介の客ばかりだった。

「あ」

それが挨拶だった。裕次郎とは小学校からの同級生だ。高校までは同じ学校へ行っていた。もう同じ学区に住み続けている者は、かなり少なくなった。裕次郎のように家が店をやっても後を継がずに会社員になるものも多かった。むしろわたしのようなサラリーマンで、転動のない人間のほうが珍しいのかもしれない。「また、頼むわ」裕次郎がそういう画用紙を渡してきた。「新入荷 コロンベ ノ」とある。これは「新入荷 コロンビア」と読む。

裕次郎は高校2年の夏に若いチンピラと大立ち回りをした。夏休みのある日、午前1時ごろ三条大橋を彼女と歩いていた。これから帰るところだったそうだ。そこへクルマが一台。最初は男二人がひやかしてきたらしい。ところが相手にしないでいると車を止めて中から4人が降りてきた。まずいと思って逃げようとしたとき、さらに2台がすでに止まっていた。相手は10人ぐらいだったという。裕次郎はその時、わかった。狙いは彼女である晶子なのだ。さらう気なのだ。

必死で逃げようとし、無理となったら闘った。多勢に無勢だが、あまりの騒ぎに警察が来た。だから助かった。通報してから到着まで持ちこたえた、というのが正しいのかもしれない。

裕次郎の傷は深く、バットで殴られた頭蓋骨は基底骨折。長い入院だった。彼女を守ったのは良いけれど、そんな時間までひっぱりまわして、という両親の抗議を受け入れて、晶子とは付き合わない事になってしまった。それからだ。裕次郎の書く字にところどころ横棒が抜けるようになった。本人は正しい字を書いているという認識で、眼には「そうみえている」と言うのだが、実際は線が抜けている。たいてい常連客の誰かがチェックしているのだが、いったい帳簿などは大丈夫なのだろうか心配になる。裕次郎の両親は健在だが、店に出てはこなかった。

「トオル、晶子の絵、見にかへんか」

突然、裕次郎が言った。意外な言葉だった。高校を出てもう5年が過ぎていて、晶子と裕次郎は夏の事件以来、別れたものだと思っていたから。「がんばってるらしいで。いったりいな」 なにか虚を突かれたような顔をしていたのだろう、裕次郎がにっこり笑った。わたしは「マーベラスブレンド」400グラムの入った紙袋を持ちながら曖昧にうなづくだけだった。

翌日、裕次郎に教えてもらった、町屋を改造した画廊へ出かけた。もう5年経っていて、晶子がわかるかどうか不安だった。猫の絵の前に晶子がいた。

それは背中だったけれど、すぐに晶子だと「わかった」。

わかった。

痩せぎすの、けど背筋のぴんとした立ち姿。違うのはトレードマークのように着ていた、大きなサイズの白いシャツではなく、微かに光る黄緑のシャツだった。ポニーテールにした髪ではなく、少年のように短くした髪だった。十字路の裕次郎の店から斜めに切るように自転車で駆け抜けた「少年」が輝く眼でこちらを振り返った。

(了)



久しぶりの友人たちとの食事会もようやく終わり、帰路を急ぐ電車の窓には、礫のように打ちつけられた雨の痕跡が残っていた。私はすっかり暗くなった街を見ながらその日のちいさな話を反芻していた。友人たちの子供たちもほとんどが大学生か社会人になり、みんなやっと自由に出歩ける時間ができたのだ。

遠近両用の眼鏡をかけてアドレスやら電話番号を入力していく。みんなケータイを使い出して日が浅いから、仕事で使うことを余儀なくされている私や理恵子には質問の嵐だった。

高校の同級生たち。みんな年をとり、めいめいの夫はそろそろ還暦に手が届こうとしている。

いろんなことが報告された。加代子は癌で術後二年経過。みんなで励ました。由紀子のところは実家の呉服問屋が倒産したとのこと。嫁いでいないお姉さんを心配していた。みんなの口数が減った。この街にずっと残っているのは理恵子と私だけけれど、お互い年賀状のやり取りぐらいしかしていなかった。理恵子は家具のトータルコーディネートの仕事をまだ頑張ると言った。みんなが、わあ凄い、と。

私にもいろいろと報告すべきことがないわけではないのだけれど、子供もいないし、22歳で結婚してから今の今まで有頂天になるような出来事もない代わりに、崩れ落ちてしまうほどの不幸にも見舞われたことはなかった。みんなの話を聴いていると、下手なフィクションなど全て吹っ飛ばすほどの不幸にも見舞われたことはなかった。みんな、それが一番よ、と言う。その顔に向かって、そうだと思うの、と真顔で答えることができた。

私と夫と...二人で生きてきた。

だけど今は心配だ。家で夫一人が待っているから。加代子が新幹線の予約を3時間も遅らすものだから、みんな調子に乗っちゃって、変える予定がとんでもなく遅くなってしまった。ケータイで家に電話をしても留守だった。たぶん散歩にいつているのだと思うけれど。

夫は今日から自宅待機である。私が同窓の友人と会う予定はだいぶ前に決まっていて、今日はずっと家にいようかとも思ったけれど、夫は久しぶりなんだから行ったほうがいと熱心に勧めてくれた。真面目で仕事一筋の人なのだ。酒もタバコもギャンブルもやらない。趣味らしい趣味はなくて、しいていえば散歩ぐらいである。そんな人が仕事場にも行けず家にいるというのは、どういう気持ちなのだろう。今晚は色々話をしなければ。それよりなにより、あの人は家事なんてやったことがない。夕飯だって外で食べるという気が全然ない人だから、何かつくらなきゃ。

私は段々とせつつかれるような気持ちになって外を見ていた。水たまりに夕日が映えてきらきらと光っている。途中で何か買って帰ろうか、それともいったん家に帰って、これからどこかに食べに出ようと言ってみようか。頭の中で考えが錯綜した。

最後は駆け足になっていたかもしれない。すっかり暗くなった路地の裸電球の光の下めがけて私は飛び込んでいった。まるで函のような路地の中の一つの戸を開ける。今までこの時間にはいなかった夫がそこにいるはずだった。家はしんとしていた。いや、何か音がする。

「ただいま」

すぐに家の中へ駆けこむ。

「ごめんなさい遅くなっちゃって。お腹すいたでしょ。すぐになにかしますから」

コートを脱ぎ捨て、鞆を放りだし、洗面所へ走って大急ぎで普段着に着替えて、...そこでまだ夫の声も姿も確認していないことに気がついた。

「あなたあ」

台所へ走った。背中が見えた。

「お帰り。まあまあそんなに急がなくてもええやんか。今、お茶を入れるから、まあ、ゆっくりなさい」

お茶!!! 夫は台所で湯を沸かし、茶を入れる用意をしていた。言葉を失った。そんなこと結婚以来一度もしたことのない人が、器用にお茶をいれてくれている。

「はい」

ことん、と湯のみが前に置かれ、わたしはわけのわからないままお茶をすすった。寒い中を駆けて来たので凍えていた手が、じんわりと温くなった。お茶はとてもおいしかった。

茫然とする息が整っていくのを見計らったかのように、夫が言葉を接いだ。

「もう、いままでみたいに急いたり無理したりしなくてやんやから。 な、今日はあれを食べとこ」

夫が指で示した居間のテーブルの上には缶詰が二個だけ置いてあった。

何か言おうとしたけれど言葉が壊れて、感情が溢れた。夫は静かな顔をしている。白いシャツの背中はいつもの様にぴんとまっすぐだ。

夫が私の顔を覗きこんだ。わたしはどんな顔をしていたのだろう。夫が小さく笑った。そんな顔を初めて見た。

「あかん？」 「ううん、...ええよ...ありがとう」

自宅待機は続くけれど私は夫がこのまま仕事を辞めてもかまわないと思うようになっていた。こんどの食事会でみんなに「缶詰」のことを言ってみようと思う。みんなどういうかな。気味悪がるかな。でもわたしはその時感じた感情をみんなに言おう。きっとみんなものんびり言葉を返してくれるはずだから。

(了)

花束

いちめんのハルシオンの花を刈取り小さな花束をつくった。それを静かに夜の中において私は瞑目したのだった。それまでのお話。

わたしの散歩する道は街の小さな川に沿っている。川は岸も底もコンクリートで固められている。道から見た川向こうはぎりぎりまで家が立ち並んでいた。そのなかに、夫婦で営んでいる誂え紳士服の店があった。そこは川側が、嵌めごろしの大きなガラス窓3枚の壁になっていて、店内の趣味の良い生地が整然と並んだ棚や、作業をするテーブルとそこで仕事に没頭している主人の姿がつぶさに見えた。

その嵌めごろしの窓とコンクリートの川の壁とのわずかな隙間には、煉瓦で仕切られたちいさな花壇があった。そこには真赤なゼラニウムがいっぱい植えられている。わたしが散歩をはじめてからずっと見ているので、かなり前に植えられたのだろう。ゼラニウムはよく手入れされていた。花をつけるとグレイのコンクリート壁と茶の煉瓦、緑の茎、赤い花、と色が重なり、そのコントラストに眼を楽しませていたのだった。

ある日、ふと気になった。あのゼラニウムはどうやって植えたのか。そして、手入れはどうやってしているのか。と、いうこと。

店からは花壇に手が出せない。川側へ出る扉もない。川の横は隙間なく家が繋がっていて、かりに紳士服店の主人なり妻が手入れをしようとするなら、10mほど下流の橋から川の中を歩いて行かねばならない。まして、川は「蓋の飛んだ箱」型にきっちりとコンクリートで固められている。高さ3mほどの垂直の壁があり、さらにその上の4段ほどの煉瓦づみの中にゼラニウムは育っているのだ。

ふいに気になりだしたきっかけは、今朝だった。昨日まで咲き誇っていたゼラニウムが見事に剪定されていたからである。川のこちら側を歩いていると、一目でわかる切り口が見えていた。

その時、裁ち鋏を握って仕事をしている主人が顔を上げ、わたしと眼があった。たぶん、わたしの目が丸くなっていたのだろう。主人は、はっきりわたしにむかって、にやりと笑って軽く会釈をした。そして、ふたたび仕事にかかる、ほんの僅かの中に生地の棚の傍らにいる妻を見た。彼の視線を追って妻を見ると、妻のいる生地の棚の上に小さな硝子の瓶があり、そこには真赤なゼラニウムの束が活けてあったのだ。思わず頷いたりでもしたのだろうか、妻がげげんそうにこちらを見ているのに気づいた。

慌てて先を急いだ。それからだ。それから考えが散り出したのだ。

こんなふう思った。ある夜。川沿いの街灯に照らされて川の中を、長い梯子を担いで歩く主人がいた。梯子を自分の家の窓の下に向かって立てかける。すると、店に灯りがつき、窓に妻が現れる。主人はナップサックを背負って、梯子を昇る。上につくとザックの中から剪定バサミやら肥料やら薬剤を取り出す。

主人はゼラニウムの状態をチェックし、不要な枝や伸びすぎた部分を剪定し、置き肥を並べる。必要とあれば薬剤も散布する。花が満開になっていれば綺麗に切り取り花束にすると、慎重にザックにいれる。

そうしてまた梯子を抱えて川を下るのだ。おそらく妻はそのあいだ店内から身振り手振りで指示を送っているだろう。

ちょっとした無言劇みたいに。

だがその日の昼下がりにこうも思った。でもまあ、ゼラニウムだけのためにそこまでするかな。丹精こめるなら玄関側で育てないか。その時、想像の視野に隣の家の植栽が浮かんできた。そこには老人が一人で住んでいるはずだった。

あの花壇は紳士服店の夫婦ではなくてあの老人が管理しているのではないのかな。（その家の川側には小さな扉がついていて、老人も小さな鉢で植栽をしていた。）そうだ。老人の家からなら、家との間に仕切りがなければゼラニウムの管理もきちんとできる。

わたしはひそかに自信を持ち、その仮説を携えて、次の日の朝、川の横を歩いていった。老人の家を観察してみた。ゼラニウムの手話をすべく隣へ歩けるようになっているかどうか。

見ているうちに戸惑いと不安が心を覆い始めた。

隣とはきっちり白い壁で仕切られていた。しかも扉を開けた形跡がない。そう見えるほど老人の家の川側のスペースは荒れていた。白い小さなプラスチックの鉢で栽培されていた植物はあるいは枯れ、あるいはだらしのない徒長を続けていた。

そしておびただしい雑草。

そのことが指し示しているのは老人の「長期の不在」だった。毎日歩いていながら紳士服店のゼラニウムにばかり目が行き、まったく隣に目をやっていた自分に気がついた。

人間の見ているものなんてそんな程度なのだという諦めよりも、見えていなかったことに、わたしは揺さぶられたのだ。

老人がここにはいないことを確認するのはたやすかった。下流の橋を渡り、玄関側の通りを歩いてみた。すでに老人の家は全てのライフラインが止まっていた。新しい管理会社の看板が玄関にはりつけられていた。

しばらくして彼の「不在」が永遠であること、そしてその旅立ちには誰にも知られることなく1ヶ月ののちに「確認」されたという事を知った。

ある朝のことだった。散歩をしていると紳士服店の窓際がえらく賑やかだった。「いやー、精がでますなあ」こちら側から川の中に向かって声がかかった「手を入れないとねえ」川の中にはしごを立てかけ、そこから紳士服店の主人がにこやかに応えていたのだった。

手にはステンレスの美しいショベルが輝いていた。主人と目があつた。「おはようございます」「おはようございます」朗々とした声だった。

輝きに目をしかめながら彼のほうを見た。すると彼を透かして荒れ放題の老人の植栽たちが見えた。そこにはどこから種が飛んできたのか、ハルシオンが根つき白い花を一面に咲かせていた。

『花束』

その言葉が頭を掠めて行ったのはその時だった。

(了)

ふたたびの花

—カンボジア伝統舞踊チュンパーニエツテに供える—

生き残ったものの記憶を一身に縫い合わせた娘が

ゆっくりと舞い始めた

指はそりかえり天を逃がさないように

からだは波となり 想いの形を洗っていくように

絹糸を引くような視線を追えば

花は

人々の手の透明な供物

微かに声明が始まり

木の打つポリリズムとともに

なにものかを呼びに行く

祝福される美神

この世ならぬ空の間から

花が

帰ってきた

すべてのみえない あなたに届きますように

すべての蕾が開きますように

すべての殺された魂に撫ぜられて

娘のからだは 光を放つ

花が

咲いていく

ふたたびの

夕暮れFantom

空に傷がない

濁った色がないよ

瑠璃色の夕暮れ

まっしろなホォロォのランプシェードと電球

湯気の舞う あげものやさん

視線に傷がない 濁ったまなざしがないよ

新聞紙を折る音

脂で揚げる音

みじかな挨拶

真っ黒な脂のついた壁に響く

傷のない夕暮れの街の音

もう少しで夜が始まるよ

帰ってくる人の影が長く伸びて ご本人より先に到着

まるでFantom

影に向かってみんなのあたまがいつせいに振り向いた。

誰かが くすくす

冬の夕暮れ

みんな くすくすくす

夜の声

辻は石畳
月あかりの真夜中は
宙に浮かぶ
飛びの石

浮かれは飛び
消えていく人影
小走りの女
闇が影を包む

月光を反射する
瓦と猫の眼と

声

しずかな声
猫と瓦に降る銀粉が揺れた

飛び石が静かに浮きあがる
ふたりでひとつの影をのせ
此の世の彼方へ舞っていく

まばたきの中に
白いかかとが消えて
夜は 終わりを
見失う

アイロン

祖母に外泊の許可が下りた。春先に重い病気が見つかって、ずっと入院していたのだ。何度も申請をしたのだけれど、その日になって炎症反応が出たり、血量が少なかったりで帰れなかったのだ。

母が叔母の車で慌しく朝9時に病院に向かった。父は相変わらず仕事が忙しくて深夜にならないと帰れないという。祖母はすっかり瘠せて小さくなってはいたけれど、とても可愛らしく微笑んでいて、なんだかほっとした。祖母の好物の食事を済ませ、女三人がかりで祖母をお風呂に入れた。実は祖母が一番帰りたかった理由はこれだった。病院ではくつろいでの入浴ができなかったのだ。

それが終わると私は祖母の洗濯物にとりかかった。かわかして、たたむころには夜も更けていた。

祖母の病気は血量が減少していくという厄介な病気だったから、明日、水曜の朝には必ず病院に帰らなければならない。週に2度は輸血が必要なのだ。

音に気がついたのは夜中の2時だった。居間でさーっという音が繰り返されていた。

父だった。父が祖母のシーツに、ネクタイをはずしただけの恰好で真剣にアイロンがけをしていた。見た事のない表情にあっけにとられていると、横をすり抜けて母が部屋に入っていった。細長いアイロン台に乗りきらないところを母が持って、二人は黙ってアイロンがけを続けた。

なんだか嬉しかった。

翌朝、父はさっさと会社に行った。父と祖母は話ができただろうか。祖母はシーツのことを知っているのかな。ずっとそれが気がかりだった。

学校から帰ると母がきちんとお化粧をしていた。

「葉子、悪いけれど今晚、ちょっと御願ね」

「どうしたの」

「ふふ、夕食だけのデート」「えっ」

「お父さんが誘ったんだよ。たまには、ね」

映画館の前で父が待っているという。それは二人が結婚前から逢っていた場所だった。

祖母が昔、あの笑顔で私に教えてくれたのだ。

いってらっしゃい。

(了)

遠くで悲鳴が響く水田と
同じような灰色の家たち
二階から響く知らない人の声
からだの芯に沈めた魂を
こっそりひきあげにいくんだ

円をつくる指のなかの月あかり
発火する日々の思い
燃え跡にあらわれる魂は
椿の種のような

いったい何万年眠っていたのだろう
黒く月に輝いて
あなたがわたしを生きているのか
わたしがあなたを生きているのか

花をなんども
結ぶのだね

光がひとり 三月の庭で踊っていた
翳が縁側に座り 持ち主のない胸が 光の中に言葉をくべていた
椿の蕾は満身でひらこうとしていた 漆喰は硬い冷風のなか しつとりと立っていた
苔は瞑目したまま枯れ果てて生きていた

冬が崩れる

覗き窓から西の日の火
ほどけてしまった望みなど すべて燃やし尽くす
ここは冬をおりたたむ 光の函
言葉が どんどん 燃えていく
肉と息が こそり
いったい なにをしゃべって生きてきたのか
生きること以外 創りださない
函にいた

まるで瑠璃硝子のように。指で弾くと、ぱりんと割れてしまいそうだ。電車からそんな夕暮れの空をを仰ぎ見ながら帰路についた。

家に着くころにはすっかり日は落ちて、ポストから夕刊と郵便物を抜き取り、真っ暗な家に入った。

着替えをすませ、居間のテーブルに置いた郵便物をひとつずつ見ていった。何枚か「喪中葉書」があった。どれも『喪中につき年末年始のご挨拶をご遠慮いたします...』という定型パターンの文章が続く。もう年末が始まっているのだ。わたしもそろそろ出す準備をしなければならない。

父が亡くなって、もう一月が過ぎた。父は治癒の見込みの無い難病に罹り、長期にわたる入院を余儀なくされた。それはまるで、父を失うことで受ける、わたしのショックを和らげる「配慮」のように続いた。だからだろうか、父が静かに息をひきとった時も、それにつづく葬儀の間もわたしは一度も泣くことはなかった。

我が家の喪中葉書の段取りを考えながら郵便物を仕分けていくと、また喪中葉書が出てきた。ほかのものと同様子が少し違う。定型の文章と少し違う。おや、と思い読んでいくうちに手が震え出した。ひよっとしたら息も止まっていたかもしれない。

それは生前の父から送られた喪中葉書だったのだ。

謹んで年末年始のご挨拶をご辞退申し上げます。

私儀、植村孝治は病のため、新年を皆様と迎えることができません。まったくもって残念至極でございます。身体の治癒の見込みの無いことがわかってから、ひたすらに心の治癒に専念し、そのことをなんとか達成してからあの世へ参りたいと思っております。死者からの便りだと、さぞ胆を冷やされましたかな。で、あるのなら失礼をお許しください。自らの寿命がはっきりと見えた時、わたしは自分の最後の始末までを自分でやり遂げたいと思いついた次第です。最後のわがまま、お許しください。

みなさまのご健康とご多幸を祈りつつ、お別れでございます。

植村孝治

手紙を何度も読んだ。たぶん、自らの関係先にこの葉書が送られているはずである。なんてことだろう。そう思うやいなや、そんな感情を吹き飛ばすように、なにか得たいの知れない感情の波がわたしを飲みこんでしまった。そして、わたしは葉書を持ったまま、父の部屋へ走っていた。何かはわたしを後から突き動かしていた。

遺品の整理もまだ手付かずの父の部屋。亡くなる一ヶ月前から、父は家に帰ってきていた。父はこの部屋でこの葉書の内容を書いたのだろうか。きちんと整理整頓の行き届いた机を見た。引きだしを開けた。文具は全て冷たくしん、として使われた形跡はまったくない。ベッドを見た。ここでお見舞にきた友人の誰かに葉書のことを頼んだに違いない。父が最期を迎えたベッドのサイドボードの引き出しが目に入った。開けて見た。小さな引き出し一杯に紙が詰まっていたので、開けたとたんベッドの上に紙が散らかった。紙は全て父の字で埋まっていた。

紙を掴んでベッドにしゃがみこんだ。何枚も何枚も父はこのベッドで下書きをしていたのだ。ベッドサイドの灯りをつけ、一枚、一枚読んでいった。何枚めかに下書きではなく、走り書きのメモのように書かれた文章があった。

『人間、死ぬ間際に ありがとう と言う余裕があるのだろうか...。長い間本当にありがとう』

父の自筆の言葉を読んだ瞬間、わたしは泣いた。

とうとう泣いてしまった。

あたり一面、橙の光をいっぱい溶かして。

(了)

午前5時、老犬ジャンがめずらしく散歩をせがんだ。いつもは日が昇るまでぐうっと寝ているのだが、フロアに立ちあがり尻尾を振っている。若い頃を彷彿とさせるような散歩のねだり方だ。それでなくても普段あまり歩かなくなったので、「その気」のある時はこちらがどんなに忙しくても全部放り出して散歩にでていくようにはしていたのだが、こんな早朝に、いったいどうしたというのだろう。

我が家は毎日早起きである。2年前から野良猫7匹の面倒を見ているからだ。野良猫の朝は早くて、時間が遅くなると勝手口の外で大合唱が始まる。だから、それまでに朝食をセットしなければならないのだ。ジャンが起きだしてきた時も、ちょうど彼らの食事をアルミのお皿に盛り付けていたところだった。

ジャンの様子がただならないことに気がついたぼくは、大急ぎでお皿を持って外に出た。外では出てくる気配を察した野良猫たちが右往左往して場所とりをしていた。

猫たちは一斉に食べ出した。みんな元気だ。

部屋に戻ると、ジャンがはつきり不満を顔に出して地団駄を踏んでいる。急がなきゃ。寒いけれど支度の準備の時間ももったいない。老齢のジャンは立ちつづけている事が辛いのだ。歩くか寝るかのタイミングが迫っていた。とにかくウィンドブレーカーを着こんでキャップをかぶって、素足にテニスシューズを履いて玄関に立つと、横でうれしそうに尻尾を振っている。リードをつけているともう一匹、ジャンの長年の相棒、ハナが二階から飛ぶように降りてきた。柴犬系の雑種のハナは歩く事が大好きなのだ。いつもよりずっと早い散歩の始まりでも元気潑刺。ぼくらをリードするように玄関の扉の前に立った。

そうしてぼくらは、転がるようにして夜明け前の空気の中に出たのだった。

外は寒かった。音もない。闇は白みはじめたぐらいだった。白い長毛を揺らしてジャンが歩く。足はなめらかではなくぎくしゃくしているけれど、顔は嬉しそうだ。冷たい空気が身体の中に入っていくのが気持ちいいのかもしれない。

ちょうど朝が作られはじめたところだった。

まず闇から薄墨の旗のように雲のかたちが浮き彫りになった。つぎに東の山のシルエットがほんの少しの色相の差で見えはじめた。

ぼくらはそのころ、ケヤキとイチョウの落ち葉を踏みしめて歩いていて、紅葉の前に散ってしまったケヤキの葉の茶色とイチョウの黄色がゆっくりと灰色の中から浮かび上がるのを見ていた。

鳥はまだ眠っていて、梢はしんとしたままだった。

次にお寺の境内の森の大きな楠の林冠が姿を見せた。空はどんどん闇を薄め、置いていかれた夜が山や樹の影にうずくまっていく。そろそろと伽藍のシルエットが現れはじめた。

ぼくらは大きなお寺の横の、土の塀沿いに歩いていて、何種類もの蔓と栗の樹のある塀の外れで犬たちが立ち止まった。匂いを調べている。

空を見上げると、西のふかい藍色の空にはまだ星が輝いていて、オリオンも南西の山際にたどり着いたところだった。その横のととても明るいのは人工衛星。火星もまだ見えた。金星も。だけど秒単位で星は消えていく。犬を見て、そして空を見ると、もういくつかは消えていた。

夜が終わる。

見上げると、天頂には半月。煌煌と輝いていた。

冬の星座は一年でいちばんにぎやかだ。南の空に1等星が七つもあらわれる。ほんとうは8つなのだけれど、地平す

れすれだから海にでも行かなければ、その星は見る事がきない。よく見えるのはカシオペアの「W」、オリオンの「三ツ星」、オリオンの横のプレアデス、つまり「すばる」だ。「すばる」は特別だ。「統星」と書く。「統べる星」というんだからすごい。

ハナとジャンが次の繁みに向かって動き出したとき、「すばる」が音もなく消えた。

夏の間、ほとんど歩かなかったジャンは、毎晩現れる冬の星座を待っていたかのように歩くことを再開したのだった。しかしそれにしても今朝は早い。それに歩く距離が若い頃のように長い。後ろ足が柔らかく曲がらないので、腰が大きく上下する。口は大きく開き、舌は垂れて、はあはあと大きな息の音がする。時々、ハナが横に回りこんで心配そうに顔を覗きこむのだが、前を見据えて懸命に歩く。たまりかねて「ジャン、もういいよ」といっても、全然聞いているそぶりすらみせない。

これ以上歩いたら帰りが大変になると思い始めた頃、昔、よく来た住宅地の中にぼつんと取り残された畑の周りの土の道に出た。とたんにジャンの歩きかたが変わった。

土の柔らかさなのだろう、足がしなやかに回り始めたのだ。ふっと立ち止まると、顔を上げてこちらを見る。

...あ、そうか。

しばらく道を歩いて気づいた。霜が降りているのだ。

初霜である。

ぐす、ぐすつと霜を踏む音が楽しそうだ。休耕の畑の黒土に白が滲むようにびっしりと覆っていた。犬たちは畔の草を食みはじめていた。

ふいにそこへ斜めの低い角度から鋭い橙の線が一筋刺さった。

ぴん、と霜が光った。

すると次から次と光の線が降り始めた。見る間にあたり一面が光の池になっていった。

日の出だ。

どれぐらい立っていたのだろう。ジャンの後ろ足が震えていた。ハナが小さくしゃみ一つ。ぼくの足はたぶん真っ赤になっているにちがいない。

「帰ろうか」

ジャンとハナの頭がぼくの脚をなんどもこすった。

光の池からぼくらはゆっくりと歩き始めた。光を背中に負ったまま。

(了)



● 2004年のあとがき

「光函」という作品集ができました。

「光」というテーマを中心に据えようと思ったのは、作品「光の函」にある、鹿王院の庭での経験からです。「めにみえないもの」だけれども感覚としてはっきり実感できる「光」とは、という問いから書くことが進んでいきました。

本を開き、光を感じていただければ幸いです。

「函」とは自分が世界を感じ、文章を書いているいる場所としての「はこ」、そして読者の皆様に作品一つ一つが「手紙」として届き、その手紙の収まった「はこ」という二つの意味で使っています。

次の方たちに感謝いたします。

素晴らしい表紙絵の制作を快諾してくださった竹林柚宇子さんに。

本の企画、編集をしていただき、優れたアドバイスもいただいたインターネット出版局ゴザンス編集部の杉本さんに。

そして、本の出版に際して強く背中を押していただいた上津裕さんに。

ありがとうございました。

2004年

西原 正

● 2012年、電子書籍版「光函」のあとがき

電子書籍版「光 函」をお読みいただきありがとうございました。ゴザンスのネット画面上に作品を投稿することから始まり、そこから作品をチョイスし紙の本として発刊する。その作業から8年の月日が流れました。

2012年、Pubooの作成画面に原稿を流し込みながら作品を読み返していると感慨ぶかいものがありました。

作品に何度も登場してきた愛犬のジャンとハナは天国に召されました。

作品制作を励ましていただいた上津裕さんも亡くなりました。

みなさんの助けがなければこの本はできなかつたと改めて思い、あらためて感謝いたします。

そして紙の本となった作品たちが再び「ホーム」といえるネットに戻ってきました。

Pubooを通じてネットでできること、つまり紙の制約でできなかった画像も入れました。

オリジナルの本に対してもう一度誤字脱字を直し、一部書き直しも施しています。

本全体が「光函」という作品です。光を感じていただければ幸いです。
続編の「音函」「街函」もよろしければどうぞお読みになってください。

2012年

西原 正